

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「支援のスタートは、気付き」

- 1 乳児期（0歳～1歳まで）明確な症状はなく、診断をつけることが難しい
  - ・ASD（自閉スペクトラム症）が疑われる特徴としては、視線が合わない、人の顔を見ながら反応を確認しようとし、共同注意をしない（「あそこにワンワンがいるね」と言ったら、大人の視線の先にいる犬と一緒に見る）、指差しをしないなどが挙げられる。
- 2 幼児期（1歳～就学前まで）子どもの言動に対する違和感が顕著になってくる
  - ・ASDの特性としては、3歳を過ぎても言葉が出ない（知的に遅れがないと、その後には伸びて言葉の遅れを取り戻す）、オウム返しや独特の声の調子、呼び掛けに反応しない、奇妙な行動（手の平を見せながらバイバイする、手をひらひらさせる、換気扇のファンをいつまでも見ている）をするなどが挙げられる。更に、感覚過敏（抱っこされることを嫌がる、極端な偏食）、運動のぎこちなさ、些細なことでパニックやかんしゃくを起こしやすいことが指摘されている。
  - ・ADHD（注意欠如多動症）の特性としては、家でも外でもいつも動き回っている、全然寝ようとしめないなど、活動性が高く、エネルギーに溢れている状態が長時間続く。
  - ・その他の特性として、子ども同士の関わりが少ない、いつも一人で遊んでいる、集団の輪に入れない、他の子どもと一緒に行動がとれない（みんなが椅子に座って話を聞いているときに一人寝そべっている）などの行動も見られる。
- 3 児童期（小学校時代）行動面だけでなく、学習面の特性も気付かれやすくなる
  - ・ASDの特性としては、対人関係の問題が顕著になる。学校行事等の決められた予定に合わせるのが苦手で、生活習慣にこだわりが強く、人の目を見て話すことや相手の感情を推し量って関わるのが不得手である。結果的に攻撃やいじめの対象になりがちになる。
  - ・ADHDの特性としては、立ち歩く、おしゃべりが止まらない、集中できない、片付けができない、忘れ物をするなどの行動が頻繁に現れる。立ち歩くほどの多動は、3年生くらいから減る傾向にある。貧乏ゆすり、椅子をガタガタさせる、いつも身体を動かすなどの軽症の多動は、児童期から思春期、時には成人期まで持続することがある。
  - ・その他の特性として、授業についていけないという知的レベルの問題が明らかになってくる。学習状況、SEN児童生徒チェックリスト（県総合教育センター支援班特別支援教育担当よりダウンロード可能）、知能検査を実施することで、知的障害なのか、LD（学習障害）なのか、総合的に判断する。その上で、本人及び保護者と合意形成を図りながら、就学先の変更や合理的配慮の提供を考える。



特性の強い子どもは失敗体験が続くと、学習意欲や自己肯定感が低下します。また、年度途中で学びの場の変更は難しく、すぐに支援を受けられないことがあります。支援のスタートは、保護者と学校の気付きです。「早くから支援を受けてきた子どものほうが、社会に出たときの適応がよい」と言われています。「1年の4月」から支援を受けられる園・校内体制を整備しましょう。1年生は最初で最大の支援ができるチャンスです。



### とれたて直送便



### 「見付ける、気付くは、学びの第一歩」

①聞いたことはすぐ忘れる、②見たことはよく覚えている、③やったことは分かる、できるようになる、④自分で見つけた、発見したことは身に付く。人は自分で答えを見つけたとき、気付きの喜びに満たされる。その喜びをエネルギーに、学びの第一歩を踏み出すことができる。同じ答えであっても、自分で見付けるのと、他人から教えられるのとでは、大きな差がある。子どもが自ら見付ける、気付く指導を心掛けたい。